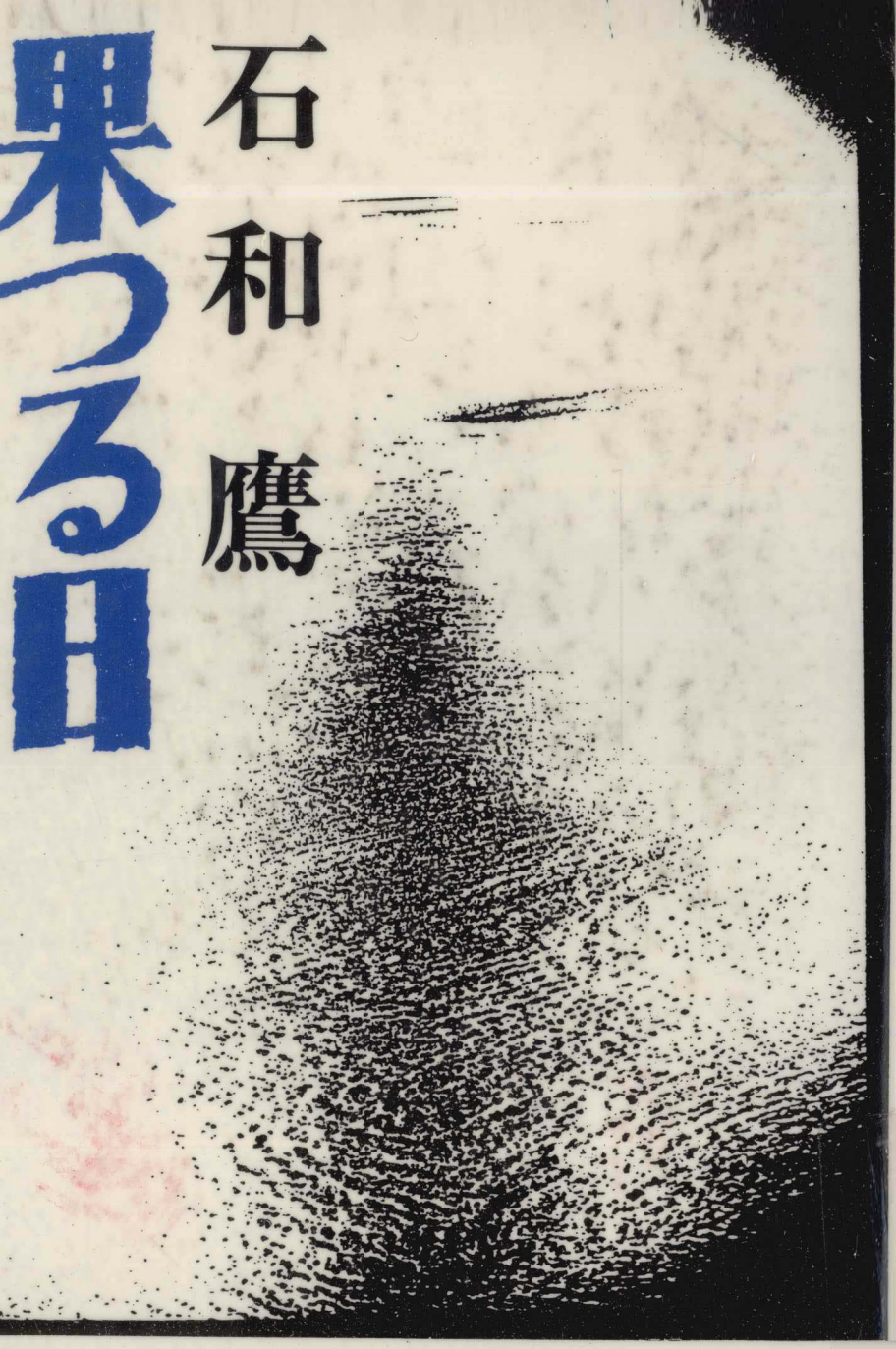
果つる日

石和鷹



文藝春秋

果つる日　奥付

昭和六十一年三月二十五日　第一刷

定　価　一三〇〇円
著　者　石和（いさわ）　鷹（たか）
発行者　西永達夫
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三　郵便番号一〇二
電話東京（〇三）二六五局一二一一
本文印刷　理想社印刷所　附物印刷　凸版印刷
製　本　矢嶋製本
万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

© Taka Isawa 1986　Printed in Japan

果つる日〈目次〉

掌（てのひら）の護符　5
瓢湖へ　61
果つる日　119
自画像について　182

装帧——司修

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

果つる日

掌（てのひら）の護符

一

朝、吟二は家を出るとき、玄関わきの窓の窓わくに、ヘタな鉛筆書きの落書きを見つけた。はきかけた靴を蹴とばし、おでこをくっつけるようにして、その文字を眺める。

――赤星家元気いっぱい!!

アマダレが二つ、他の文字とは不釣合な大きさで書かれてある。娘の三輪のしわざとすぐに知れた。三輪は小学校六年だった。長男である弟の結一(ゆういち)は三つ下の小三で、いくら背のびしてもここまで手はのびない。

二十五坪に満たぬ小さな土地だが、分不相応の借金をして、吟二は一昨年この家を建てた。荻窪駅から南へ十五分ほどのところで、近くに荻外荘があり、善福寺川が蛇行しながら流れている。善福寺川にかかる松見橋という小橋を渡ると、ほどなく右手に新しい家の門が見えてくるのだっ

た。

善福寺川は生活排水による富栄養化で、夏には水面が盛りあがるほど藻が繁茂したが、その藻の緑の間を縫って鯉が泳ぎ、冬になるとおびただしい鴨の群れが舞いおりて羽を休めた。まず、閑静な住宅街と言っていい。

女房の桂子がとりわけこの環境を愛した。桂子はゴミゴミした小石川の下町に育ち、吟二といっしょになってからも、長年、小さなアパート暮しをつづけてきた。静かな住宅地に一戸をかまえたい、というのが桂子の夢だった。吟二は住居などというものにさして執着のあるタチではないが、住んでみれば、注文建築だけのことはあって、造作はしっかりしていて、落着けるのである。ウサギ小屋と言われようと、何と言われようと、吟二夫妻には大事な家だった。

一昨年の冬、この家に家族四人で引越してきたとき、吟二は一応しかつめらしく子供たちに言いわたした。

いいかお前たち、家の中で乱暴なふるまいをするな、マッチやライターなどみだりに火を使うな、あちこちに落書きするな。この家は自分たちの家に相違ないが、まだ完全に自分たちのものとは言えない。月々のローンは向う二十五年間にもわたって、ズシリと重くお父さんの肩にのしかかってくるのだぞ。

だが吟二は、その最後の言葉を口には出さず、咽喉のところで嚥(の)みくだした。子供らは、急に目をシロクロさせてもだえる父親の顔を、何か不思議ないきものでも見るように見つめていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「ではわかったな、終り」
「はーい」
と、二人は大きな声で答えたのだった。
三輪はその禁を一つ犯したことになる。
しかし、吟二に、三輪をとがめる気持はこれっぽっちも起らなかった。黒革に赤のふちどりのあるランドセルを背負って、今朝、吟二の方を振り返り振り返り出かけて行った三輪の丸顔が目に浮かぶ。その後を、トーストを横にくわえた結一が小走りに駆けて行った。いまごろはたぶん二時間目ぐらいの授業を受けている刻限だ。それにしても、二人ともどうしてああ算数ができないか、と吟二はよけいなことをちらと頭のすみで考えた。この間の結一のテストの結果は百点満点の四十点だった。答案はくしゃくしゃにまるめてゴミ箱の中に突っこんであった。ふふ……、吟二にもおぼえがあった。親ゆずりだ。
吟二は靴を足もとにおき、煙草に火をつけた。出勤時間はもうギリギリだが、何か一つ心にひっかかるものがあって、玄関から一歩を踏み出せない。……ふと思いあたって、吟二は二階の子供部屋へ入った。子供部屋は八畳ほどの広さで、中央に本棚をおいて二分し、それぞれに木製のベッドと勉強机を備えつけた。入口は一つ。アコーデオンドアである。でもそれはただついているというだけのことで、誰でも自由に出入りできる。けれども吟二は、もうだいぶ前から三輪の部屋には入ったことがない。いっしょに風呂に入らなくなったのはそれよりさらに前のことだ。

吟二はまず三輪の机の前に立った。コミック誌が山のようだ。机の上にもベッドの枕もとにも、犬、猫、熊、猿、狸にいたるまで、大小さまざまの動物の縫いぐるみがてんでに勝手な方角を向いてひしめき合っている。まだ子供なのだ、いっぱしナマイキなことを言ったって……。パジャマが脱ぎ捨てられているのを、吟二は拾いあげて椅子の背に掛けた。

三十センチほど開けられた窓から、まだそれほど汚れていない九月の朝の風が吹きこんでくる。花模様のカーテンの裾が揺れていた。吟二はぐるりを見わたす。勉強机の前の壁に馬鹿でかいサイジョーヒデキのポスターが鋲でとめてある。ピンときた。鋲を引き抜いてポスターをめくりあげると、思った通り、『赤星家元気いっぱい!!』という落書きが、太いマジックで黒々とそこに書かれてあった。吟二はかるく舌打ちした。

結一の部屋ときたら、それこそ足の踏み場もない。プラモデルの部品に接着剤や塗料の小びん、雑誌の付録や汚れたシャツ靴下類まで散乱して、何やらヘンな臭いまで立ちこめている。結一にはまだ寝小便の癖があった。しくじってしまったものは仕方ないから、汚れたパンツやパジャマはすぐ洗濯機にほうりこむよう厳命してあるのだが、姉の三輪にからかわれるのがいやさに（洗濯機をまわすのは三輪の役目だ）、どこかすみっこへ、出来の悪い答案といっしょにまるめて突っこんであるのにちがいない。

吟二はヘキエキして、ここでもう一本煙草に火をつけた。煙を輪にして吹きあげながら、およその見当をつける。結一の描いた宇宙戦士何とかの絵が、ベッドの頭の上のところにガムテープ

ではりつけてある。吟二は思わず笑った。ここだここだ！　爪を立ててガムテープを剝がす。画用紙が垂れ下がり、『赤星家げんきいっぱい!!』のマジックの文字が現われた。こっちは、元気が平仮名になっている。吟二はそれを見てからていねいに絵をはりなおし、階段を降りながら、手の甲でぐいと目の下のあたりを拭いた。

稚拙な文字に、子供らの祈りがこめられていた。母親の病が子供らの心にどす黒い影を落しているのは明らかだった。幼いなりに、鋭敏に何かを予感して、みずから護符をつくる。何やら正体はよくわからないが、自分たち家族の上に襲いかかってこようとするオソロシイ力に必死に立ち向おうとしている。額を寄せ合って相談している二人の姿が吟二の目に見えてくる。その心根が胸にしみた。吟二は急に疲れを感じた。

ダイニングキッチンの椅子に腰をおろして罐ビールを一本飲む。まだ正午前だけど、かまうものか。ちょっと腹具合が悪いので少し遅くなる……と、勤め先に電話をする。

二本目をあけた。と、電話が鳴った。吟二はバネ仕掛けの玩具のように飛びあがった。受話器をサカサにつかんで耳にあてている。ちぇ、このごろはいつもこうだ……。

「はい、赤星です」

「ああ、あたし……」

麻布のアパートに一人住いしている老母だった。八十を越えたとは思えないほど張りのある声だ。

「どうだい、その後？」
「いま病院へ行ってるよ」
女房の桂子のことであった。桂子は癌におかされていた。S状結腸の癌であった。一年前に手術をした。手術は成功したが、リンパに転移があると言われた。それがどういうことなのか、何を意味するか、吟二にはよくわかっていた。
今年の前半は元気だった。その間だけ、吟二は病気のことを忘れていられた。リンパに転移があるなんて言ったって、毎日制癌剤を服みつづけていることだし、うまく行けばこのまま生きのびて行くことも可能なのではないか、と思ったりもしたほどだ。そういう稀なケースだってあるんじゃないか……。だが、その夢はあっけなく断ち切られた。
「やっぱり、悪いのかい？」と老母が言った。
「うん、どうもはかばかしくない。だんだんつらくなってきたみたいだ」
「入院させた方がいいんじゃないかね？」
「いまのところ、一日おきの注射だけだから……。医者も通院でいいと言ってるしね。それに、再入院なんてことになるとかえってガックリ来ちゃうんじゃないかなあ。そういう例がかなりあるそうだ」
「そうかもしれないね。だけど、どうしてあんな病気にかかっちゃったんだろうねえ」
「そんなこと言ったって仕方ないじゃんか」

「子供たちは元気かい？」
「元気いっぱい！」
と言って、吟二は少し笑った。落書きのことを言おうと思ったが、やめた。
「炊事や洗濯は？」
「まあ何とか……。福生の義姉がときどき来てくれるし、三輪もちっとは手伝うようになったしね。苦しいときは丼ものかホカホカ弁当ですませるさ」
「困ったことだねえ。あたしもだいぶボケてきてハンパ仕事しかできないけど、何かのときは手伝いに行くよ」
「いざというときは、たのむよ」
電話はそこで切れた。
——吟二は掌の汗を荒々しくズボンの尻で拭いた。いざというとき……、ついもらしてしまった自分の言葉に、吟二はこだわらずにいられなかった。言ってはならない不吉な言葉を口にしてしまった、と思った。じわじわとキリもなく汗がにじみ出てくる。吟二は立って、家の中の窓という窓をいっぱいに開け放った。
九月もなかばだというのに、夏がつづいている。白熱した太陽が中ぞらにあった。隣家とのさかいに植えられたヒバの列が、濃緑色の炎のかたちで天に突きささっている。雲ひとつない、カンと冴えた夏の空。まったく、何という空だ！　庭には血の色のカンナ。紋白蝶が二匹、いやに

せわしなく乱舞している。草いきれが濃い。悩ましくなるほどだ。森羅万象、きそって過剰な生命力を誇示していた。吟二には、突然、それが理不尽なことと思えた。あさましいほどの理不尽さだ。吟二はビールの空き罐を床に捨て、思いきり踵に体重をかけて踏みつぶした。

吟二のほか、いま、この家には誰もいない。それなのに吟二は、自分のまわりに大勢の人間、あるいは魑魅魍魎でもひしめいているかのように、肩をそびやかし、あたりを睥睨して、重々しく独りごちた。

「赤星家元気いっぱい!!」

算数なんかできなくってもいいぞ。

二

虫が知らせる、ということはどうやらほんとうにあるみたいだ。それがやってきた一カ月前の夜のことを、吟二は細部まで明瞭におぼえている。

吟二はその日、早目に仕事を終えて帰途についた。うだるような暑い一日だった。吟二は歩きながら目がくらんだ。早く帰って冷水のシャワーを浴びたい。そしてそのあと、ゆっくりと一本のビールを飲もうと思った。

荻窪の駅ビルでアイスクリームを買う。念のため、少量のドライアイスを入れてもらった。だからというわけではないが、善福寺川の松見橋にさしかかるころから、吟二の足は何だか急に重

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com